

高さ15m 付替道路を多数アンカーで

宮城県
名取市

宮城県名取市は県の中央南部、県都仙台市の都市圏にある人口8万人弱の自治体です。その地勢は隣県福島から流下する長大な阿武隈川と、山形県との県境を水源とする名取川の2大河川が太平洋に注いで形成された沖積平野、そして西部の丘陵地帯で構成され、この丘陵地を水源とする河川もまた多く市内を流れています。

そうした市内河川のひとつ、一級河川の川内沢川は、名取市街地や仙台空港、臨空工業団地を抜けるその地理的特性と、河道が狭小なため流域一帯が古くより度々の洪水被害を受けてきた背景から、洪水に対する安全度の早期向上が喫緊の課題となっていました。

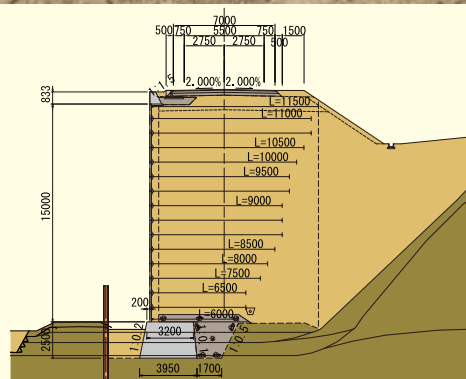
このため、ダムによる洪水調節で地域を水害から守るとともに、市域



の耕地等の取水の安定供給及び河川環境の保全を図るため、川の上流域に「川内沢ダム」の建設計画がスタートしました。

ダム建設にあたっては付替道路などの工事が先行して行われ、岡三リビックの多数アンカー式補強土壁工法もここに採用されています。

現地は高さ15mにもなる盛土の新設道路と旧道、さらに川内沢川が狭い谷筋で並行しており、垂直補強土壁でなければ施工の難しい区間。くわえて土質の適用範囲が広く、現地発生土の再利用が可能な点などが評価されました。



工事概要

施主：宮城県仙台地方ダム総合事務所
工事名：川内沢ダム付替市道道路改良工事その2
施工会社：グリーン企画建設株式会社
商品名：多数アンカー 1,897m²



お国自慢

悲別町

沖繩リビック 小林悟史

私の生まれ育った北海道空知郡上砂川町は、かつて炭鉱で栄えた町です。札幌市と旭川市をつなぐ国道二一線のほぼ中間に砂川市があり、そこから山側に十キロほど入ったところに位置しています。

この上砂川町は、一九八四年に放送された倉本聰脚本のテレビドラマ「昨日、悲別で」の舞台になったことでも話題になりました。倉本聰と言えば「北の国から」シリーズが有名ですが、「昨日、悲別で」も道内の架空の町・悲別町を舞台に若者の人間模様を描いた秀逸なドラマでした。

実はこのドラマの当時は炭坑も現役で、石炭や旅客の輸送のために鉄道（函館本線上砂川支線）も通じていました。八七年の炭鉱閉山に伴って鉄道も廃線となってしまいましたが、当時の上砂川駅の駅舎は廃線時のままで保存されており、ロケ地巡礼で訪れる観光客のために駅銘標もドラマでの「悲別駅」に変えてあります。

町には他にも、炭鉱の歴史が垣間見える「かみすながわ炭鉱館」や大自然に囲まれた温泉旅館もあります。是非一度お立ち寄りください。

岡三リビック
商品群

道路・盛土 多数アンカー式補強土壁工法 トリグリッドEX パラリンク フラットパネル RRR工法 EDO-EPS工法
ダイブラハウエル管 法面・防災 多機能フィルター ミニアンカーDO PDR工法 サビレス100
維持・管理 ARISライナー工法 SWライナー工法 RCGインナーシリカ Tn-p工法 ローマットHDB
鉄鋼建材 ライナープレート コルゲートパイプ 景観・環境 ロッキーステージ 斜面いりどり工法 フォトリックアート

河川改修を効率的に推進

新潟県湯沢町

新潟県山間部の土砂災害抑止を担う国土交通省湯沢砂防事務所は、管内に300基を越える砂防施設を抱え、計画的効果的な災害対策に継続的に取り組んでいます。

特に近年は気候変動に伴い水害も激甚化・頻発化が著しく、「流域治水」の考えのもと、土石流、流木、土砂・洪水氾濫などのリスクから地域の人々の生活を守るため、「防災・減災、国土強靱化のための5か年加速化対策」による砂防堰堤や護岸等の整備を推進しています。

湯沢町の松川入川ではそうした事業の一環として、流木による被害を防止・軽減するための流木捕捉機能を既設砂防堰堤の上流部に付加する工事が行われました。

この工事では切り回し水路が必要になりその流量も多いため断面を大きく取らなければなりませんが、岡三リビングの「コルゲートRFフリューム」であれば波付けが水の流れと同じ縦方向のため粗度係数が小さく、他の工法による水路よりも小断面にできることから採用となりました。

コルゲートRFフリュームは使用後の買い戻しにも対応しているため、工事費の圧縮を果たしながら、部材をできるだけ廃棄しないSDGsを見据えた建設事業の推進にも貢献します。



工事概要

施主：国土交通省北陸地方整備局
湯沢砂防事務所
工事名：松川入川溪流保全工その5
施工会社：(株)文明屋
商品名：コルゲートRFフリューム20-D
220m (96m+124m)

コルゲートRFフリューム



徒然月記

記：編集T

都市災害を予習

東京都はあまりにも巨大で、もし首都直下地震など起きようものなら様々な困難に直面することが危惧されている。特に災害発生後の救援が思うように進まないことが想定されるため、東京都は他力本願にならない防災知識を身に付けるよう折に触れて都民に啓発している。

そうした目的に沿って設置されたのが、港区お台場にある「そなエリア東京」。被災直後七十二時間をどう過ごすか、を学ぶ施設だ。商業施設のエレベーター内で地震に遭遇する場面から学習体験がスタートし、一歩建物を出ると目の前には瓦礫と化した市街地が広がっている。その中で、街の何が危険か、どう対応すべきかなどを設問に沿って学習していく。

一方、東京消防庁も災害体験施設をいくつか設置しているが、墨田区にある「本所防災館」は地震体験に加えて、暴風雨を実際に受けたり、水位のある状態で家や車のドアを開閉してみるなど、昨今の豪雨災害を反映した体験が興味深い。暴風雨は秒速三十メートル、雨量三十ミリ時を最大とする風洞で雨合羽を着て体験するが、実際にやってみると死ぬ思いだった。雨風が激しいからではなく、叩き付ける雨に顔を背けると風が目の前をハイスピードで流れ去り、空気を肺に送り込む力が負けるのだ。これは実際に体験してみてもその意外な驚きだった。



岡三リビング株式会社

東京都港区港南1-8-27 日新ビル ☎03-5782-9080



札幌・盛岡・仙台・高崎・東京・新潟・金沢・長野
静岡・名古屋・大阪・米子・広島・高松・松山・福岡
鹿児島・沖縄リビング・岡三リビングベトナム